

新入生の皆さんへ

図書館は“Source of inspiration”だ

図書館長 樋口 穰



新入生諸君、ご入学おめでとうございます。春先からの新型コロナウイルスの流行などもあって、とくに初めて親元を離れて下宿生活に臨まれる方には不安が多いことでしょう。一日も早く大学生活のコツをつかみ、頼りになる先輩や新しい友人をみつけてだして乗り切ってください。この原稿を書いているのは、まさにCovid-19の流行に歯止めが見えていない3月初旬です。小中学校の一斉休校が政府から要請され、不要不急な外出も自粛すべき空気が蔓延しています。博物館など公共施設の一部にも休館するところが出ています。本学の図書館も感染拡大防止のための臨時休館を実施しています。一方で、公立図書館のなかには休館せず、休校となった学校の受け皿となって生徒達が来館する事態に対処したところもありました。このような状況に図書館はどう対処すべきか、何が出るのかという課題を突きつけられた気がします。大学図書館独自の危機管理について今後も引き続き考えて行かないといけません。

さて、大学の図書館について新入生諸君に理解して貰うために、小説に登場する大学図書館の例を挙げたらどうかと考えたのですが、実はあまり芳しくないのです。まず、大学の図書館が登場する小説そのものが少ないようです。図書館一般に広げてみても、あまりよい例が見つかりません。一般的に図書館は、書物のカタコンベ（イタリア語：catacombe 地下の墓所のこと）であるかのようなイメージが根底にあるようでいけません。なんとなく密室的で、ミステリアスで……と言うわけで、ミステリー小説では事件の現場や発端として描かれることが多いのです。大学の図書館が登場する、紀田順一郎の『第三閲覧室』（創元推理文庫）では、学長の私的稀覯本コレクションを収めておくための第三閲覧室で死体が発見されることから

物語が展開して行きます。京都外国語大学付属図書館の第三閲覧室では、死体が見付かったことは一切ないのでご安心下さい。本学図書館には貴重書室はありますが、もちろん学長の私物コレクション収蔵庫ではありません。それどころか、教科書などの写真で表紙しか見たことの無いような歴史上貴重な全国でも指折りのコレクションが収蔵されています。歴史番組や時代劇のエンドタイトルに資料提供として本学の名前が出てくることもありますから、チェックしてみてください。博物館などの特別展に資料を貸し出すこともあります。機会があれば図書館のデータベースを検索して、どのような資料が収蔵されているかご覧になって下さい。ビックリするようなものが揃っていますよ。でも、図書館では本そのものがお宝であることよりももちろんそれもアリですが、書物が秘めている情報こそがいちばんのお宝なのです。書物が秘める情報とは、単にその内容にとどまりません。手に取った時の重さ、装丁や手触り、ページを繰るときの紙とインクの匂い、活字のレイアウト…五感の全てに伝わる情報を感じ取って下さい。それはネットでは得られないお宝です。図書館は書物のカタコンベではなく、まさにSource of inspirationなのです。

皆さん、図書館に宝探しに来て下さい。お待ちしております。なお、本学の図書館は7号館の本館だけでなく、9号館にアジア関係図書館（Kyoto United Nations Depository Library）を設置し、サービスを開始しています。

詳しい情報や図書館が行なうガイダンス等については図書館ホームページをお見逃しなく。旬でお得な情報が満載です。

ひぐち じょう（教授・日本文化史）